

【隣人監禁】親切なエリート医師の異常な愛情
～処方されたのは、一生解けない足枷でした～

サンプル(一部抜粋)

「...おや、次は顔が赤くなった。
...熱でもあるんじゃない？」

「...ちょっと恥ずかしかっただけ？
あはは、可愛い人ですね。」

「...ん？ ああ、これですか？
これはね。拘束具ですよ。」

「診察中に君が暴れて、自分を傷つけてしまわないようにするための『優しさ』です。
...ほら、手を出して」

(カチャカチャ音・拘束する)

「さてと。では再開しましょうか。
...さっきよりもここが湿ってますよ？」

「優しく勃起したクリトリスをなぞって
...指で弾いてみましょうか」

(少しの水音・こする音)

「...ね。言った通りでしょう？
すぐに甘美な啼き声になると。」

「...僕の指に吸いついてきますね
...中で少しだけ動かしてみましょうか？」

「やだ？ 嘘つき。」

「...口ではそう言いながら、僕の指を離したくないみたいに
こんなに欲しがって吸い付いているじゃないですか」

(2本入れる、大きな水音)

「...いい音。
...そんなに高い声を出して、お隣さんに聞こえたらどうするんですか？」